

JAAL-in-JACET 企画

## 第 1 回 授業学研究大会 大会要綱

日時：2019（令和元）年 5 月 25 日（土）

11：00-17：00

場所：東洋大学白山キャンパス 10 号館 3 階

（東京都文京区白山 5-28-20）

連絡先：jacetsigjyugyougaku3@gmail.com

## 目次

会長挨拶.....	1
授業学研究会 3 支部代表からのご挨拶.....	2
プログラム.....	3
研究発表プログラム詳細.....	4
アブストラクト.....	5
基調講演アブストラクト.....	5
基調講演レジュメ.....	6
研究発表.....	11
シンポジウム.....	17
会場案内.....	19
大会運営委員一覧.....	21

## JAAL in JACET 企画「第1回授業学研究大会」の開催に際して

一般社団法人大学英語教育学会  
会長 寺内 一

記念すべき令和元年の最初の月である5月25日に開催しておりますJAAL in JACET「第1回授業学研究大会」にご参加いただき一般社団法人大学英語教育学会（以下、JACET）を代表したしまして、衷心より御礼申し上げます。また、大変立派な会場をご提供いただきました東洋大学様に厚く御礼を申し上げます。次頁からの授業学研究会3支部代表からのご挨拶にもございますように、この「第1回授業学研究大会」の開催に至るまでには、長い年月がかかっておりますので、その経緯を振り返ってみたいと思います。

JACETは2005年に第1次授業学研究委員会を発足させ、特に大学の英語授業に焦点を置いた研究に着手いたしました。その集大成が2007年の3月に松柏社から『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例中心に』（大学英語教育学会授業学研究委員会（編））であり、その「はしがき」に、「本書は大学などの高等教育機関における英語授業を実践事例に基づいて分析・考察したものである。大学の英語授業を概観し、主要な問題を掘り下げて解説している点において、『大学英語授業学』の概論所・入門書としての性格を備えるものであるといえる」とあるように、まさに、これを持ってJACETは大学における英語授業学研究をスタートさせたのです。この第1次授業学研究では、大学の授業がかかえる数多くの問題を確認し、授業そのものの改善の方向を示したといえます。

さらに、2010年には第2次授業学研究委員会が設立され、第1次授業学研究をさらに掘り下げて、「学力とは何か」「学びを妨げている要因とは何か」などいくつかの項目に焦点を絞り研究を行いました。その成果報告が『高等教育における英語授業の研究—学習者の自律性を高めるリメディアル教育』（JACET第2次授業学研究特別委員会（編）2012年）としてまとめられています。

その後、授業学研究は関東、中部、関西の3つの支部の研究會に引き継がれ、それぞれが独自の研究を重ねてまいりました。そして、JACETはこれら3支部の授業学の研究活動を統合すべく、2016年度から2018年度まで「授業学」をテーマとして英語教育セミナーを開催いたしました。2016年度は「授業学を生かす英語教育イノベーションI」（青山学院大学）、2017年度は「授業学を生かす英語教育イノベーションII」（関西外国語大学）中宮キャンパス、2018年度は「授業学を問い直す—だれが'practitioners'か」（京都府立大学）が個別テーマで、この3年間を総括した形で、2019年12月にはひつじ書房から書籍として研究成果を刊行することになっております。

このように、本日の第1回授業学研究大会がJACETの長い授業学研究から生み出されたものであることがおわかりになりましたと思います。まずは、本研究に携われて来られた方々に改めて感謝の念を表わしたいと思います。そして、本日ご参加の皆様のご研究に本大会が何らかの形で貢献できることを確信しております。授業学研究をはじめとしたJACETの活動へのご参加とご理解をよろしくお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

## 第1回 授業学研究大会によるこそ！ 授業学研究会3支部代表からのご挨拶

佐藤 雄大（名古屋外国語大学・中部）

皆さん、こんにちは。第1回の授業学研究大会に参加していただきありがとうございます。JACETは第1次、第2次の特別研究委員会としての授業学研究、そしてセミナーとしても3年にわたって授業学を取り上げてきてきました。また関東支部、中部支部、関西支部の三支部に経緯が異なっているものの「授業学研究会」があり、授業学研究の土壌が形成されてきたと思っています。これからこの授業学研究をさらに発展させていく上でこの研究大会が重要な発表の場となっていくと考えています。授業学は理論と実践の「往復活動」が重要で、真摯に日常の実践に向き合うところからすべてが始まると思います。この研究大会に集い、理論・実践の知見を交流させ、これからの授業や授業研究の一助になることを祈っています。

村上 裕美（関西外国語大学短期大学部・関西）

本日は、三支部合同による第1回授業学研究大会にご参加くださり有難うございます。2005年に第1次授業学研究委員会が発足して以来、このように授業学という名のもとに大会が開けることを待ち望んでいました。第1次からすでにおよそ14年経ちましたが、いまだ「英語授業学」の理論化は進んでいません。JACETにおけるSIG活動として3支部が独自の研究活動を展開していますが、それぞれの研究の基礎をなす共通の土壌を整備していく時期がきています。本研究大会は、その貴重な一歩となる歩み寄りの機会と捉えます。英語授業学が軸を置く研究の土壌を、日本の英語教育の現状に即したものとして機能するよう確立していく必要があります。合同研究大会を重ねながら、授業学研究の体系が可視化できるよう活動したいと願っています。

馬場 千秋（帝京科学大学・関東）

第1回授業学研究大会にご参加いただき、ありがとうございます。2005年にJACETで第1次の特別研究委員会が発足して以来、第2次、そして関東・関西・中部の3支部の個々の授業学研究会の活動、英語教育セミナーでの3年間の授業学特集を経て、このたび授業学に特化した大会を開催する運びとなりました。大学における「英語授業」を理論と実践の双方から研究する場として、JACETで授業学が始まってから14年、理論としての「英語授業学」を確立し、より発展させていく時期が来ています。3支部のみならず、全国で「英語授業学」に関心を持っている先生方とともに、今後、毎年、研究大会において、大学の英語授業の実践におけるアイデアや授業研究の手法等について意見交換し、「英語授業学」研究がより活発なものになることを願っております。

<プログラム>

時間	内容	会場
11:00- 11:10	開会式： 授業学研究会 3 支部代表挨拶： 佐藤 雄大 (名古屋外国語大学教授・JACET 理事) 大会中の諸注意（会場校）： 渡邊 勝仁（東洋大学）	A304
11:15- 12:15	基調講演： 「授業学研究の一実践例：場面・文脈を利用した文法指導」 岡田 伸夫 先生（関西外国語大学教授） 司会：村上 裕美（関西外国語大学短期大学部准教授）	A304
12:15- 13:05	昼食	
13:05- 15:00	研究発表（3 会場）（詳細は次ページ）	
15:00- 15:15	休憩・移動	
15:15- 16:40	シンポジウム： 「これからの英語授業学」 司会・提案者：馬場 千秋（帝京科学大学准教授・関東） 提案者：佐藤 雄大（名古屋外国語大学教授・中部） 村上 裕美 (関西外国語大学短期大学部准教授・関西)	A304
16:45- 16:55	閉会式： 閉会の辞：村上 裕美（関西外国語大学短期大学部准教授）	A304
17:15- 19:00	懇親会	

<研究発表プログラム詳細>

	A303	A304	A305
13:05- 13:30	実践報告 「2つの大学での英詩入門授業の試み」 森永弘司（同志社大学<非>）	研究発表 “Improving teaching practice through research on EFL learners’ language learning beliefs” 林千代（国立音楽大学）	研究発表 「学習者が求める異文化適応目的のE S L授業の在り方」 大味潤（東京経済大学<非>）
13:35- 14:00	実践報告 「自己調整学習の観点から大学生のメタ認知力を促す試み -大学1年生秋プレゼンテーションクラスIを通して-」 陸田絵里子（日本工業大学<非>）	研究発表 「質的データ分析に対する共起ネットワーク図と Jaccard 係数について」 森明智・佐藤雄大（名古屋外国語大学）	研究発表 「異文化理解における語彙情報・視覚情報・翻訳の効果的活用：関連性理論の観点から」 岡裏佳幸（福岡工業大学）
14:05- 14:30	実践報告 “Looking for meaningful language interaction and language instruction” 江口均（北星学園大学）	研究発表 「英語授業学研究の枠組にもとづく授業の効果：自由記述データの語彙出現頻度と対応分析の一事例」 鈴木政浩（西武文理大学）	研究発表 「語頭子音連続発音指導に関する効果 -日本人大学生英語学習者の母音添加に着目して-」 渡邊勝仁（東洋大学）
14:35- 15:00	実践報告 「大学英語教育における英語資格・検定試験対策の授業内部分導入の実際: TOEIC の活用と効果」 松岡弥生子（国際基督教大学）		研究発表 “The Effect of Job Interview English Learning Model (JIELM) in Classrooms” 木村美由紀（東京慈恵会医科大学<非>）

\* 司会はつきませんので、時間になったら、各自で開始し、時間通りに終了をお願いいたします。

\* 各部屋に会場係がおります。機器のことで何かあれば、お知らせください。

<アブストラクト>

## 基調講演 A304

「授業学研究の一実践例：場面・文脈を利用した文法指導」

A Practice of Class Studies: Context-/Situation-Based Grammatical Explanations

講演者：岡田 伸夫 先生（関西外国語大学）

前半では、まず、英語授業学とは何かについて考えます。英語授業学が何かを定義しておかないと実質的な研究が進められないというわけではありませんが、やはり自分なりの定義を持っておくことが望ましいと思います。次に、JACET における英語授業学研究の誕生の背景とその発展の契機について考えます。というのは、大学英語教育学の抽象化（abstraction）、理想化（idealization）、分割統治法（the divide-and-conquer approach）に基づく科学的研究の発展こそが、英語授業学の誕生、発展に大きく寄与していると考えられるからです。最後に、英語授業学研究の今後の発展のために何をすべきかについて少し考えてみます。

後半では、私が大学の英語の講読の授業で文法をどのように教えてきたかを簡単にお話しします。講読の第一の目的は読解力、英文を正確に、余すところなく理解する力を高めることですが、私はテキスト選びにも少し時間をかけました。というのは、学生に知ってもらいたい内容が書かれたテキストを選びたい、学生が分析力、思考力、判断力、論理的推論力などの力を開発するのに資するテキストを選びたいという思いがあったからです。

読解力は英文法力が不十分だと伸び悩む傾向が見られます。私は学生には大学レベルの英語に出てくる単語やイディオムや構文の意味をできるだけ正確に、余すところなく教えたほうがいいと思っています。そのために、詳しい学習英和辞典や大部の文法書で仕入れた知識を忠実に、あるいは、多少加工して提供することもありました。

ある時、説明を要する文法事項（単語やイディオムや構文）が出てくる場面やその前後の文脈の中に、当該の文法事項の意味（文法的意味と語用論的意味）を知る手掛かりが著者によって用意されていることに気がつきました。学生をそれらの手掛かりに注目させれば、自分が拙い状況を設定して説明したり、ピンボケの説明をしたりするより、効果的ではないか。そう考えて、場面・文脈を利用した文法指導を実践してきました。もちろんそれが唯一の文法指導というわけでもありませんし、毎回説明に成功したというわけでもありませんが、文法指導法の一実践例としてご紹介いたします。

## バイオデータ

関西外国語大学英語キャリア学部教授。授業学（関西）前代表。専門は学習英文法。著書に『言語科学と関連領域』（共著、岩波書店）、『英語教育と英文法の接点』（美誠社）、『学習英文法を見直したい』（共著、研究社）があります。現在、大修館書店『英語教育』の Question Box で英文法の問いに回答しています。

## 授業学研究の一実践例：場面・文脈を利用した文法指導

### A Practice of Class Studies: Context-/Situation-Based Grammatical Explanations

岡田伸夫（関西外国語大学）

#### 1. 英語授業学とは何か

Q1：英語学とは何か？ A1：英語の諸相を研究する学問

領域：音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、共時的、通時的、方言、記述的、理論的、...

Q2：英語授業学とは何か？ A2：英語授業の諸相を研究する学問

領域：『大学英語教育学』、『英語教育政策』、『英語教育と文化』、『21世紀のESP』、『第二言語習得』、『成長する英語学習者』、『英語教師の成長』、『英語研究と英語教育』、『リスニングとスピーキングの理論と実践』、『リーディングとライティングの理論と実践』、『英語授業デザイン』、『英語教育におけるメディア利用』、『テストと評価』、...

Q3：そもそもなぜ英語授業（学）を研究するのか？ A3：自らの日々の英語授業を改善し、学生の知識の習得と、能力（5技能、思考力、判断力、表現力、...）の開発を助けるため

英語授業学：自らの日々の英語授業を改善するという目的にかなうあらゆる研究

#### 2. JACETにおける英語授業学誕生の背景

##### 2.1. JACETの誕生

1962/11/9 大学英語教育協議会の総会開催（於：東京外国語大学）

席上、（大学英語教育学の確立を目指し、）大学英語教育学会の創立を決議

注目点1：大学の英語教育に特化したこと、

注目点2：英米文学・英語学から「独立」したこと

##### 2.2. 大学英語教育学研究の範囲の拡大と個々の専門分野の研究の深化

『英語教育学大系』（大修館書店）全13巻刊行（2010～2011）

##### 2.3. 日々の英語授業の改善という原点に回帰

大学英語教育学の進展に伴い、自らの日々の英語授業の改善という原点から離れて行っていないか。

#### 3. JACETにおける英語授業学発展の契機

（1）授業学研究委員会の設置と（2）大学英語教育学会授業学研究委員会（2007）『高等教育における英語授業の研究—授業実践事例を中心に』（松柏社）の刊行

#### 4. 英語授業学研究の発展のために

1st step：関東、中部、関西の授業学研究会の中で仲間と学びあい、自らの英語授業力を高める。

2nd step：3支部間の共同研究を一層活性化するとともに、広く全国のJACETの仲間と英語授業学研究の成果をシェアする。

3rd step：英語授業学研究の成果を社会に発信し、社会のレスポンスをもとにしてさらに授業学研究を進める。



## 5. 場面・文脈を利用した文法指導

### 5.1. 数えられる名詞と数えられない名詞 : Last night, I ate a chicken in the backyard.

(1) MABEL. (*Heard above the background.*) Were you the fricassee or the Cambridge steak?

MISS MEACHAM. What? Oh, it doesn't matter. Both are uneatable.

MABEL. What about the cold chicken, then?

MISS MEACHAM. *Cold chicken*? But we haven't had it hot yet.

MABEL. If I were you I'd have the fricassee. It's all right. It's rabbit.

MISS MEACHAM. The fricassee then.

—Rattigan (1985: 58)

### 5.2. 複合語の非主要部 : its star-studded sky, a mouse-infested restaurant

(2) Collecting fossils is fascinating not only for paleontologists—experts who identify and study them—but for people of all ages as well. The narrow beach under the huge white cliffs called the Seven Sisters, in East Essex, England, is an ideal site for fossil hunting. —Cleary, et al. (2009: 29)

(3) I think you all know the old story of the king who had a problem with mice, so his advisors suggested that he get some cats. The cats chased away the mice, so the mouse problem was solved.

—Cleary, et al. (2009: 16)

### 5.3. 一つのことを異なる表現で指示する

(4) At last the women brought out a photograph, dusting it zealously with her long sleeve. He had been a shoemaker, and the portrait depicted him standing by the side of a beautiful black mare.

—Kuzumi (Ed.) (1991: 4)

(5) The water hyacinth is native to South America. Gardeners around the world loved how they looked in ponds, but soon learned that the floating flower can double in size in less than a week. Since its leaves block out the sunlight and oxygen that fish and plants need to survive, this beautiful invader can easily destroy an aquatic ecosystem. The water hyacinth is on the list of “100 of the World’s Worst Invasive Alien Species” published by the World Conservation Union. —Cleary, et al. (2009: 17)

(6) All organisms are made up of large numbers of cells. Cells are too small to see by eye, but can be quite easily observed under a microscope. You can scrape cells off the inside of your cheek and look at them under the microscope. A thin sheet of cells can be peeled off one of the inner layers of an onion and viewed microscopically. —Hill & Holman (1986: 18)

### 5.4. a number of = several

(7) Or imagine a news story about a number of people who moved into an empty building because

they had nowhere else to live. If it went like this:

Several vagrants now live in the building

the writer is making us think badly of their actions, because ‘vagrants’ has negative connotations. But if it went like this:

Several homeless people now live in the building

the writer is making us think well of them, because ‘homeless’ has positive connotations. It’s more likely to make us feel sympathetic.

—Crystal (2011: 63-64)

(8) Mason said, “I give Your Honor my assurance that I think this witness is material, and that the documents are material. I will make an affidavit to that effect if necessary. As attorney for the defendant, may I point out that if the court refuses to grant this subpoena, it will be denying the defendant due process of law.”

“I am going to issue the subpoena,” Judge Haswell said, testily, “and for your own good, Mr. Mason, the testimony had better be relevant.”

—Gardner (1964: 25)

### 5.5. enough ... (so) that

(9) The school was small enough that there was no cut as such; you were supposed to figure out that you weren't good enough, and quit. —Greene (1989: 46)

### 5.6. 隠れ疑問文

(10) Why do we have accents? I've said that they tell other people which part of the country we're from. But it's not just which part of the country. Accents can also tell others about the kind of social background we have or the kind of job we do. Listen to the people who read the news on the radio. Sometimes they have a regional accent, and we can tell they come from a particular part of the country. But often they don't. We can hear their accent, and it could be from—anywhere. —Crystal (2011: 17)

(11) a. Instead of using words, these social rituals immediately tell us the situation we are in and how we should react in it. —Mosdell (1986: 24)

b. They tell not only our position in society but perhaps what form of language to use, whether to be formal or casual, what is taboo and what is acceptable behavior. —Mosdell (1986: 24)

### 5.7. 主語位置の that 節

(12) ... and they have a story in which they think I might be interested. He is circumspect, refusing to say anything about the story, except that he and Carolyn are willing to travel to Iowa to talk with me about it.

That they are prepared to make such an effort intrigues me, in spite of my skepticism about such offers. ...

—Waller (1995: 2)

(13) In an average year, 11,000 tons of herbicides and 2,000 tons of insecticides are sprayed on British farms. A large proportion of this is washed into the soil or nearby rivers, but much is absorbed by the crops themselves, and thus eventually consumed by humans. That these chemicals are harmful to human health is no longer in doubt. Until recently, however, it was assumed that farmers could not survive without using them. Not any more. —Peaty (1995: 34)

### 5.8. Be-Switch

(14) It was a clear moonlit night as Tom walked home from the village. Suddenly he heard a most peculiar sound coming from the bushes ahead. His mother had warned him to ignore strange sounds at night, as this was when the fairy people appeared. Even so, Tom paused for a moment before moving closer to the bushes to see what could possibly be making the noise. He couldn't believe his eyes! There in front of him was a little man no bigger than Tom's hand, with his beard tangled in the bush. —Carroll (1999: 4, 6)

(15) “Jesus Christ,” said Jenny. “I see half the buildings at Harvard hanging here.”  
“It's all crap,” I told her.  
“I didn't know you were related to Sewall Boat House too,” she said.

“Yeah. I come from a long line of wood and stone.”

At the end of the long row of portraits, and just before one turns in the library, stands a glass case. In the case are trophies. Athletic trophies.

“They’re gorgeous,” Jenny said. “I’ve never seen ones that look like real gold and silver.”

“They are.”

“Jesus. Yours?”

“No. His.”

—Segal (1971: 41-42)

- (16) He was about to cross the road to the town’s principal hotel where, he knew, a fine Shannon salmon awaited his attention, when he saw coming out of the hotel yard a handsome and gleaming limousine of noted marque. At the wheel was O’Connor.  
—Forsyth (1990: 22)

- (17) 判事のめざすは町一番のホテルで、そこではシャノン産のすばらしいサーモンが食べられるのだ。彼がそのホテルに向かって道路を横切ろうとしたとき、一台のピカピカに磨きあげた高級車がホテルから出てくるのが見えた。なんと、運転しているのはオコナーではないか。—フレデリック・フォーサイズ（著）篠原慎（訳）「悪魔の囁き」『帝王』角川文庫。p.286

### 5.9. 新情報と旧情報（前提と断定）の違いを踏まえた訳し方

- (18) When does a language die?

A language dies when the last person who speaks it dies. And this is happening in many parts of the world.

—Crystal (2011: 42)

### 5.10. 強勢と意味

- (19) アシャーストは足をひきずりながら黙って歩いた。ガートンが質問役に回った。

“Are you a Devonshire girl?” 「きみはデボンシャーの人かい？」	“No, sir.” 「いいえ」
“What then?” 「じゃあ、どこの人？」	“From Wales.” 「ウェールズから来ました。」
“Ah! I <i>thought</i> (emphasis in original) you were a Celt: so it’s not your farm?” 「 <u>やっぱりか。最初見たときにケルトの人</u> <u>だと思ったんだよ。</u> じゃあ、これから行く ところはきみの農場じゃないね？」	“My aunt’s, sir.” 「お婆の農場です」

—Galsworthy (1961: 9)

- (20) “Tiggers don’t like honey.”

“Oh!” said Pooh, and tried to make it sound Sad and Regretful. “I thought they liked everything.”

“Everything except honey,” said Tigger.

—Milne (1967: 74)

## 引用文出典

- Carroll, Y. (1999). *Leprechaun tales*. Gill and Macmillan.
- Cleary, K., Nozaki, Y., & Matsumoto, K. (2009). *Science Square*. 成美堂.
- Crystal, D. (2011). *The wonderful world of language*. 成美堂.
- Forsyth, F. (1990). *Sharp practice and money with menace*. 篠崎書林.
- Galsworthy, J. (1961). *The apple tree*. 大阪教育図書.
- Gardner, E. S. (1964). *The case of the crimson kiss*. 英宝社.
- Greene, B. (1989). *Cheeseburgers*. 講談社インターナショナル.
- Hill, G., & Holman, J. (1986). *Understanding basic science*. Edited with notes & study by I. Okamoto, S. Nakano, & Y. Hatanaka. 英宝社.
- Kuzumi, K. (Ed.) (1991) *A clean, well-lighted place and other stories*. 金星堂.
- Milne, A. A. (1967). *Tales of Pook*. 英宝社.
- Mosdell, C. (1986). *The mirror makers*. マクミランランゲージハウス.
- Peaty, D. (1995). *Environmental issues*. マクミランランゲージハウス.
- Rattigan, T. (1985) *Table number seven—Separate tables*. 篠崎書林.
- Segal, E. (1971). *Love story*. 英光社
- Waller, R. J. (1995). *The bridges of Madison County*. 松柏社.

## 研究発表・実践報告

### A303

13:05-13:30 実践報告

2つの大学での英詩入門授業の試み

Attempt to Teach English Poems at Two universities

森永 弘司 (同志社大学<非>) Morinaga Koji (Doshisha university)

イギリスには長い伝統を誇る桂冠詩人の制度があり、アメリカではケネディとクリントの2人の大統領の就任式に当時の代表的な詩人が招かれて詩を朗読したことが示しているように、詩の社会的認知度が高くかつ評価されている。また英米詩が登場する映画も少なくなく、英米の文化を理解する上でも詩の知識は重要である。発表者は過去に20作の英詩が登場する映画を収録したテキスト『The Poetry of Film—英詩で味わう映画—』(金星堂)を使用して、映画を活用した英詩入門の指導を2つの大学でおこなった。授業を実施したのは、定員45名の2年生以上の全ての学部の学生が履修できる「イングリッシュ・ワークショップ」という一般選択必修科目と、定員10名の経済学部の2年生以上の学生が履修できる「英語演習」という専門選択科目である。今回の発表では、はこの2つの英詩入門の授業の実践報告をおこないたい。

**Koji Morinaga** is currently a part-time lecturer at Doshisha university. He published four literary textbooks dealing with choice passages from modern classics, Roald Dahl, Pete Hamill and William Saroyan and co-wrote movie textbook. He shared the Award of the Japan Association of College English Teachers for the practice of teaching literary texts in the classroom.

13:35-14:00 実践報告

自己調整学習の観点から大学生のメタ認知力を促す試み -大学1年生秋プレゼンテーションクラスIを通して-

An attempt to develop university students' metacognition: A case study

陸田 絵里子 (日本工業大学<非>) Rikuta Eriko (Nippon Institute of Technology)

英語の必要性が一層高まる中、学生個人の意識は、英語の重要性は理解しているものの、英語は言語というより、いまだに履修すべき科目、良い成績を取るという結果のみへの認識が強いように思われる。この状況を踏まえ、本稿では、メタ認知活動、(認知活動そのものを対象とし認知をする)を自己調整学習に焦点をあてての授業実践をケーススタディとして報告する。大学1年生の後期授業、プレゼンテーション1(選択必修科目)の授業において、各授業では、メタ認知力を促すことを基本に授業を行った。初回、中間日、最終日の自己の変化の詳細アンケート、また、授業ごとの個人の振り返りを実施した。また、最終日の個人プレゼンテーションでは、プレゼンテーションの経験のない学生にとり、英語でのプレゼンテーションを実施した。少人数クラスということもあったが、学習者それぞれが、継続的学習効力の重要性など、英語学習に対して主体的に学習に関わっていこうとする意識や行動の変化が認められた。

**Eriko Rikuta** is currently a part time lecturer at Nippon Institute of Technology. Her research interests include ELF learning strategies, its reading and classroom activities.

14:05-14:30 実践報告

Looking for meaningful language interaction and language instruction

江口 均 (北星学園大学) Eguchi Hitoshi (Hokusei Gakuen University)

This presentation is a report of a classroom activity I conduct with my seminar class students of English Department at Hokusei Gakuen University. The activity involves multiple language skill development and additional multi-media material making skills. In the activity, the students in pair pretend to be an interviewer and an interviewee who is well-known, and make a video of an interview. They switch the roles to play both the roles. The activity involves 4 stages: Script making, Practice Video Shooting, Final Video Shooting and Movie Editing. There are many challenges for students and non-native speaking English instructors to overcome. The activity is successful in terms of keeping students' motivation by engaging students in meaningful conversations, by promoting creativity, and by soliciting concrete feedback from the professor.

**Hitoshi Eguchi** is currently an associate professor at Hokusei Gakuen University, English Department. His research interests include EFL speaking, testing, and English as a medium of instruction.

14:35-15:00 実践報告

大学英語教育における英語資格・検定試験対策の授業内部分導入の実際: TOEIC の活用と効果

Applying the Content of Foreign Language Proficiency Test in Undergraduate English Classes: Active Use and Effects of TOEIC L& R

松岡 弥生子 (国際基督教大学) Matsuoka Yaoko (International Christian University)

文科省によるグローバル人材育成推進を目的とした英語力評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用促進は、大学教育現場において一般英語授業の内容や進行に大きな影響を与えうる。本論では、こうした試験のうち TOEIC の一般英語授業への適用方法や学習効果について、TOEIC 受験を活かしてグローバル社会での即戦力を培う事を目指す A 大学、及びスーパーグローバル大学創成支援事業採択校の B 大学における異なる 3 つの授業を例に取り、其々に省察と考察を行う。対象授業科目は、1 年生必須英語 (17 名)、2 年生必須英語 (23 名)、3 年生選択英語 (10 名) である。授業内容と TOEIC との関係性、取り入れた問題の内容・数量・レベル、授業時間内での適切な時間配分、評価方法、授業内プレ・ポスト模試の結果といった教授内容の記録のほか、TOEIC 対策の授業内導入に対する学生の受け止め、モチベーション、自主的学習としての TOEIC など、学習者側の視点とアンケート結果を含み、検定試験対策と英語授業との共存のポイントを探る。

**Yaoko Matsuoka** is currently Research Fellow at Institute for Educational Research and Service, International Christian University, and teaching courses at Seijo University and Shibaura Institute of Technology. Her research interests include psycholinguistics, pragmatics, teacher and learner autonomy, and application of L2 proficiency tests in English learning.

### A304

13:05-13:35 研究発表

Improving teaching practice through research on EFL learners' language learning beliefs

林 千代 (国立音楽大学) Hayashi Chiyo (Kunitachi College of Music)

In recent years, educators and researchers have actively investigated language learners' beliefs in the classroom (Mohebi & Kohdadady, 2011). It has been suggested that language teachers try to find out what their students' language learning beliefs are because the knowledge helps them understand their students' approaches to language learning (Horowitz, 1987). The current study reports one such attempt to investigate students' English learning beliefs and use the findings to improve teaching practice. The participants of the study were 201 music college students taught by the presenter. The instrument of the study was based on a questionnaire developed by Suzuki (2005). The results of the statistical analysis of the questionnaire indicated that there were some wide gaps between the students' beliefs and the presenter's. The presentation will discuss the gaps and report how she adapted her teaching based on the findings.

**Chiyo Hayashi** is a professor at Kunitachi College of Music. Her research interests include language learners' individual differences, pronunciation, and pedagogy.

13:35-14:00 研究発表

質的データ分析に対する共起ネットワーク図と Jaccard 係数について

Co-occurrence Network and Jaccard Index for the Analysis of Qualitative Data

森 明智 (名古屋外国語大学) Mori Akitomo (Nagoya University of Foreign Studies)

佐藤 雄大 (名古屋外国語大学) Sato Takehiro (Nagoya University of Foreign Studies)

授業学研究において、教育効果を評価する手段として自己省察などの質的データが含まれることはよく知られている。CEFR-J による can-do リストの作成に見られるように、学習者自身による英語学習への自己省察の記述内容は、学習者の成長を考察する上で注目されている研究分野といえる。また、自然言語処理システムの発達に基づいて、テキストマイニングの観点から、これらの質的データを計量化した上で、ある程度の客観性を保持しつつ分析し評価する研究も見られる。本発表は、これらの比較的新しい研究手法の中の一つである共起ネットワークを描く際に用いられる Jaccard 係数について、先行研究では説明が成されていないことをふまえ、簡単な質的データを用いて、実際に共起ネットワーク図を描きつつ解説する。本発表では、(1)一つのグループ内の文書データの分析、だけでなく、(2)複数のグループの文書データの分析、の双方について共起ネットワークを実際に描き、英語学習における質的データの分析に関して、授業学研究に資することを目的とする。

**Akitomo Mori** is currently a graduate student of the Graduate School of Global Communication Studies at Nagoya University of Foreign Studies. His research interests include the analysis and instruction of strategies of learning English.

**Takehiro Sato** is currently a professor at Nagoya University of Foreign Studies. His research interests include EFL instruction, writing, and socio-cultural approach. He is currently a director of JACET.

14:05-14:30 研究発表

英語授業学研究の枠組にもとづく授業の効果：自由記述データの語彙出現頻度と対応分析の一事例

The Effects of English teaching according to a framework on “Jugyougaku”: a qualitative analysis of learner comments

鈴木政浩（西武文理大学） Suzuki Masahiro (Bunri University of Hospitality)

英語授業学とは授業の発展過程を枠組として提案し、その効果を検証することである。すでに確定した枠組には「楽しさの要因をふまえた望ましい授業」がある。この枠組から想定される授業の1つとして、学習スキルを配置したシラバスとチェックシートを統合する授業がある。本発表は学習者の自由記述データから、この授業に対する印象を分析することを目的とする。参加者は埼玉県内の大学生30名、実施期間は2018年4月から7月であった。いくつかの課題を設定し、その課題を達成するための学習スキル群をシラバスに配置した。参加者は自分が達成できた学習スキルにチェックを入れながら学習進度を確認した。課題の最終ゴールはCNNを教材としたオーバーラッピングとフレーズサイトトランスレーションであった。半期最後の授業（15回目）に、取り組みに関する質問紙に対する回答を求めた。質問項目は6項目（自由記述）であった。KH Coder（フリーソフト）を使用し、自由記述データにおける語彙の出現頻度、類似性測度および対応分析の出力結果を比較した。その結果、授業に対する印象を特徴的に示す語彙は、授業の狙いや目的を反映している可能性があることがわかった。

**Masahiro Suzuki** is currently an associate professor at Bunri University of Hospitality. His research interests include Jugyougaku in English teaching, oral reading, and developmental education.

### A305

13:05-13:30 研究発表

学習者が求める異文化適応目的のESL授業の在り方

Cross-Cultural ESL Class Japanese Students Want

大味潤（東京経済大学<非>）Omi Jun (Tokyo Keizai University)

日常使用を想定しない外国語教育ではなく使用を前提とする第2言語教育や、表層文化で良しとする多文化理解ではなく第2言語社会の深層文化理解を目的とする異文化教育はどうあるべきか。また日本語教育等で実践されている第2言語教育を、対人コミュニケーション目的のESLとして実践したら学習者はどう感じるのか。2006年より様々な専攻の短大、4年制大学で実施してきた授業活動を、学習者の質量共の意識変遷のデータや個別インタビューと共に紹介する。読解、文法を主流としてきた日本の英語教育が国際化時代に必要とされる対人コミュニケーション能力養成に寄与しない一方、学習者は現状に満足してはいない。受験や資格試験英語に飽き足らない学生が求めるESL授業の在り方を、日米で語学教育や武術指導に関わってきた教員の視点、これまでの授業活動の経緯、そして学習者目線の授業評価から合わせて論じ、語学教育関係者より広く意見を募りたい。

**Jun Omi** is a part-time instructor at Tokyo Keizai University. His fields of interest are ESL, JSL, SLA, and cross-cultural communication between Japanese and English native speakers, especially in the U.S. He has been interested in practical classroom activities to let his students acquire native-like fluency in the target languages.



13:35-14:00 研究発表

異文化理解における語彙情報・視覚情報・翻訳の効果的活用：関連性理論の観点から  
Effective use of word information, visual images, and translation in intercultural understanding from  
the perspective of Relevance Theory

岡裏佳幸（福岡工業大学） Okaura Yoshiyuki (Fukuoka Institute of Technology)

本研究の目的は、異文化に関する英文理解において、語彙情報、視覚情報、日本語翻訳が英語学習者の理解度に与える効果を、関連性理論（Relevance Theory）の観点から明らかにすることである。具体的には、Canadian Maple Syrup に関する英文を英語学習者に読んでもらう。次に、語彙情報を学習者に与えることによって、英文の内容理解を促す。さらに、英文の内容と関連のある視覚情報として、Canadian Maple Syrup の製造工程をスライドで提示する。最後に、英文の日本語翻訳を提示する。関連性理論の枠組では、日本語翻訳は、原著者の述べていることを英語学習者に伝えることにより、関連性を達成することができるが、それぞれの段階において、どの程度の理解度に達するのか、すなわち、どの程度の関連性を得ることができるのかを 10 段階評価で調査することによって、英文理解における語彙情報、視覚情報、翻訳の効果的な活用を検証する。

**Yoshiyuki OKAURA** is Professor at Fukuoka Institute of Technology. His research fields are translation in Relevance Theory and writing theory.

14:05-14:30 研究発表

語頭子音連続発音指導に関する効果 -日本人大学生英語学習者の母音添加に着目して-

Title (E) The Effects on Instructions of Onset Consonant Clusters -Focusing on the Vowel Insertion of Japanese University Learners of English-

渡邊勝仁（東洋大学） Watanabe Katsuhito (Toyo University)

先行研究の実験結果から、語頭子音連続発音の母音添加に関して、2つの異なる指導方法（A・B）により、日本人英語学習者にはどのような効果があるのかを検討した結果、指導方法 A が特に、/kr/, /jr/, /sn/, /fl/, /kl/ が含まれる単語に効果的であった。しかしながら、指導方法 B も単語により、限定的に効果的ではあった。本研究の目的は、同じ調査協力者に指導方法（A・B）で指導し、/kr/, /jr/, /sn/, /fl/, /kl/ が含まれる単語の母音添加の間隔が、さらに短縮されるかを検証することである。使用した語頭子音連続を含む単語は、有声音と無声音から構成される C[-voice]-C[+voice] のみを対象とした。先行研究のからの /kr/, /jr/, /sn/, /fl/, /kl/ が含まれる 5 個の単語と、新たに 10 個の単語を追加し、検証する。分析方法として、コンピュータプログラム Praat を使用し、調査協力者からの録音した音声の子音連続間の母音添加の間隔をミリ秒単位で計測し、先行研究の結果からどのような違いがあるのかを検証する。

**Katsuhito Watanabe** is a lecturer at Toyo University. His research interests include pronunciation teaching, English as an international language, and listening.

14:35-15:00 研究発表

The Effect of Job Interview English Learning Model (JIELM) in Classrooms

木村美由紀 (東京慈恵会医科大学<非>)

Kimura Miyuki (The Jikei University School of Medicine)

This research reports on an original teaching method of job interview skills. Gerstmann's (2002) three focal questions were adapted to this case study: Q1. Does this individual have the ability to do the job? Q2. Will this individual do the job? Q3. Will this individual fit in the organization? The presenter explored how these key questions can be handled and responded to. From this information, a working hypothesis and an original model (Job Interview English Learning Model: JIELM) was developed to give students a visual guideline to the overall procedure for handling the interview process. To show whether or not students' job interview English communication skills improved, pre- and post-tests were conducted. The data is as follows: T university students (N=63) participated in the study in an English course during the second term in 2016. After having been given six intensive lessons, the data showed statistically significant at .001 level.

**Miyuki Kimura** is currently a part-time lecturer at The Jikei University School of Medicine. Her research interests include corrective feedback, medical interview, and online education.

## シンポジウム A304

「これからの英語授業学」

司会・提案者：馬場 千秋（帝京科学大学准教授・関東）

提案者：佐藤 雄大（名古屋外国語大学教授・中部）

村上 裕美（関西外国語大学短期大学部准教授・関西）

2004年4月にJACET第1次授業学研究委員会が発足し、2007年9月まで活動を行ってきました。その後、2010年4月から2年間、第2次授業学研究特別委員会の活動を全国組織として行いました。研究会としては、2008年3月より関東、2012年4月に中部、2015年4月に関西、それぞれの授業学研究会が立ち上がり、各支部での活動のみならず、2016年の北海道での合同シンポジウム、その後、3年間の授業学をテーマにしたの英語教育セミナーを通じて、今後、どのように英語授業学研究を考えていけばよいかを検討してきました。中でも、2018年度のシンポジウムにおいて、英語授業学の理論構築の必要性について、各支部で問題提起を行っております。

本シンポジウムでは、各支部が研究会の中で行っている理論構築と、理論を活かした実践について、議論を深める機会としたいと考えています。

### <関東>

関東支部では、「授業」そのものをどのように研究すべきか、ということを考えながら、輪読を行ってきました。中でも、日本で伝統的に教師の間で自律的に行われている「授業研究」が、1990年代後半以降、*lesson study*として、アメリカをはじめ、海外で発展していることに着目し、秋田・ルイス(2008)『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』（明石書店）や河野(2009)『わかる授業の科学的探究 授業研究法入門』などを通じて、大学英語授業を観察し、研究する手法について考えてきました。授業研究を行う目的としては、①「授業改善」②「教師の授業力形成と向上」③「授業を学問としてとらえ、研究に発展させること」がありますが、①②は小学校、中学校、高等学校においてははかばか活発に行われており、教員養成においても、必要不可欠なことと言えます。この①と②については、大学の英語授業研究として、どのような形で取り入れていくべきなのかを提案いたします。また、③については、いくつかの研究手法を取り上げ、今後、どのようにして研究を発展させていくべきかについて述べたいと思います。

### <中部>

中部支部では発足当初から理論的な研究に基づいて授業学を考えてきました。その柱となってきたのが認知心理学者が学習活動にフォーカスして領域横断的に始めた「学習科学」(Learning Sciences)です。源流になるのが発達心理学者のヴィゴツキー、そしてそれを認知心理学の中に位置づけたジェローム・ブルナーやマイケル・コールなどの研究を背景に形成されてきた研究群と言えます。認知科学で積み重ねられた知見と実際の学習場面での現象を分析対象として「人の学びとは何か」が研究されてきました。その成果は*How People Learn: Brain, Mind, Experience, and School* (2000、翻訳『授業を変える：認知心理学のさらなる挑戦』)や*The Cambridge Handbook of the Learning Sciences* (2006、翻訳『学習科学ハンドブック』)に結実しています。今回この学習科学の一つの成果となる「ジグソー法」に触れ、実践例と併せて「理論と実践の往復」という視点からこれからの英語授業学について述べたいと考えています。

<関西>

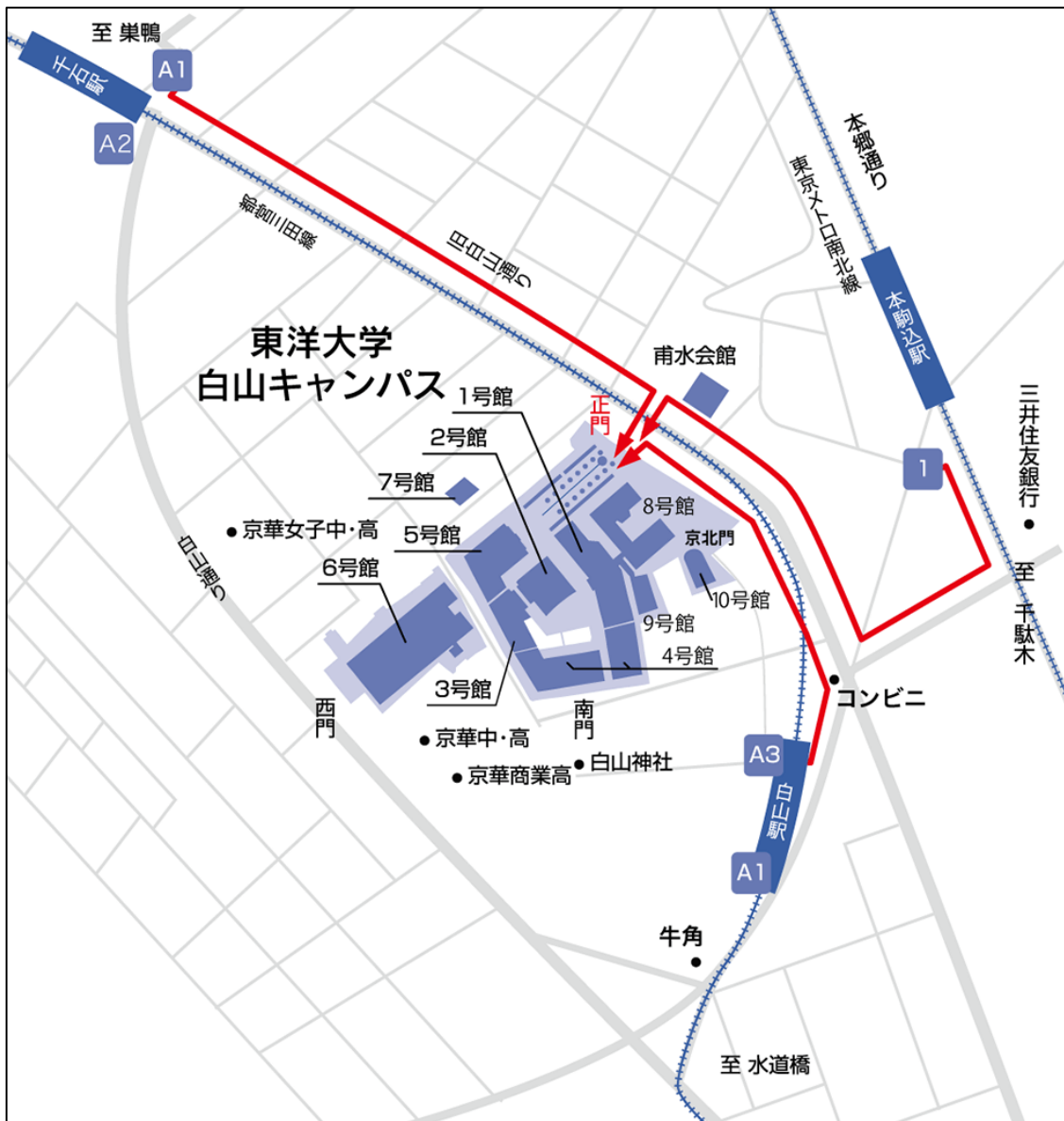
関西支部では、発足当時から「失敗から学ぶ授業改善」をテーマとし、実践された授業を授業者が授業分析を行い、研究メンバーとディスカッションを行いより自身の授業を客観視する研究を行ってきました。その際、Jack. C. Richards. (1996) *Reflective Teaching in Second Language Classrooms*.を輪読し研究理論としました。また、指導法 (how to)の研究だけでは真の授業研究に至らないのではないかという疑問から Dick Allwright. (1991) *Focus on the Language Classroom*. および Judith Hanks. (2017) *Exploratory Practice in Language Teaching. Puzzling about Principles and Practices*.の輪読を重ね、授業で起きている事象を教師のみの苦勞により解決しようとするのではなく、学生とともに授業の研究者として哲学的に考察する (why) 視点を取り入れる授業研究法を現在試みています。また、2004年に第1次授業学研究会が始まる13年前に出版されていた、松畑熙一 (1991) 『英語授業学の展開』を日本における英語授業学の先行研究とし、授業学研究の基礎を固めていく試みを紹介します。

**Chiaki Baba** is currently an associate professor at Teikyo University of Science. She received her Ph.D. from Tokyo Gakugei University in 2016. Her research interests include EFL writing, its assessment system, and developmental education. She is currently a Vice-secretary General of JACET.

**Takehiro Sato** is currently a professor at Nagoya University of Foreign Studies. His research interests include EFL instruction, writing, and socio-cultural approach. He is currently a director of JACET.

**Hiromi Murakami** is currently an associate professor at Kansai Gaidai College. Her research interests include stylistics and teacher education.

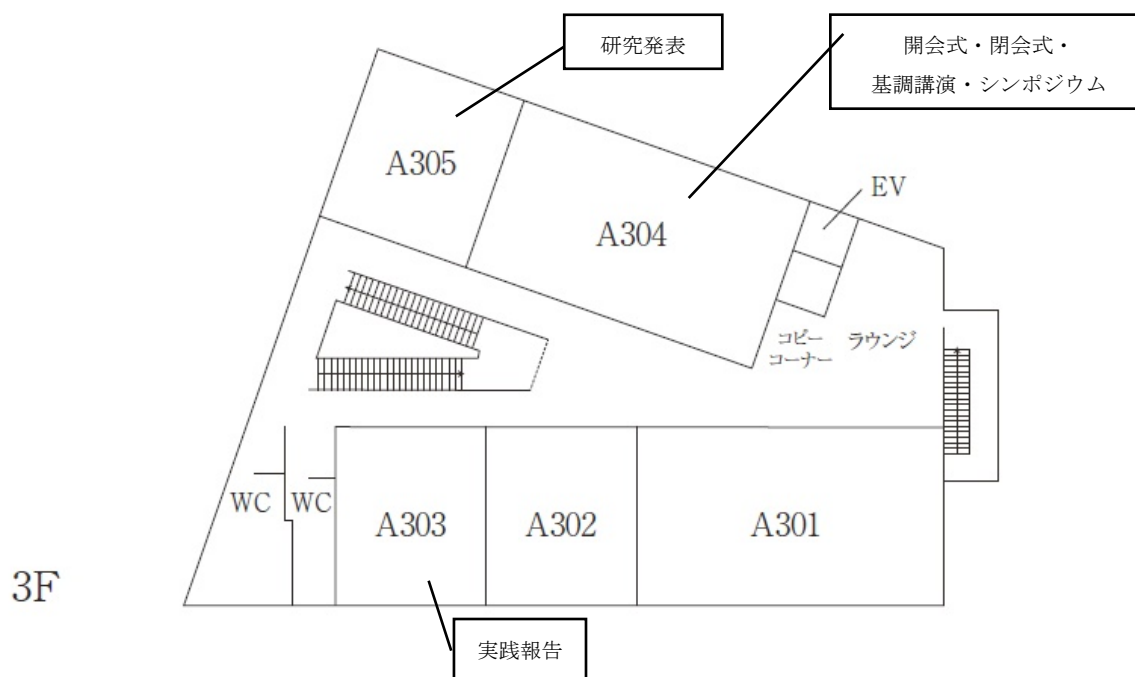
会場案内：



都営地下鉄三田線 白山駅 A3 出口より徒歩 5 分  
東京メトロ南北線 本駒込駅 1 番出口より徒歩 5 分

「正門」からお入りいただき、左手に 10 号館があります。

## 10号館案内



自動販売機は2階ラウンジにあります。  
この他、大学近隣にコンビニエンスストアがあります。  
昼食は、大学近隣のレストランの他、学内の学食等もご利用いただけます。

## 第1回授業学研究大会 大会運営委員会

### 授業学研究会代表

馬場 千秋（帝京科学大学・関東）

佐藤 雄大（名古屋外国語大学・中部）

村上 裕美（関西外国語大学短期大学部・関西）

### 運営委員：

林 千代（国立音楽大学）

小西 瑛子（帝京科学大学＜非＞）

松原 知子（成蹊大学＜非＞）

松家 由美子（静岡大学）

仲谷 都（東洋英和女学院大学）

西田 晴美（跡見女子大学）

陸田 絵里子（日本工業大学＜非＞）

渡邊 勝仁（東洋大学）

油木田 美由紀（東洋英和女学院大学）